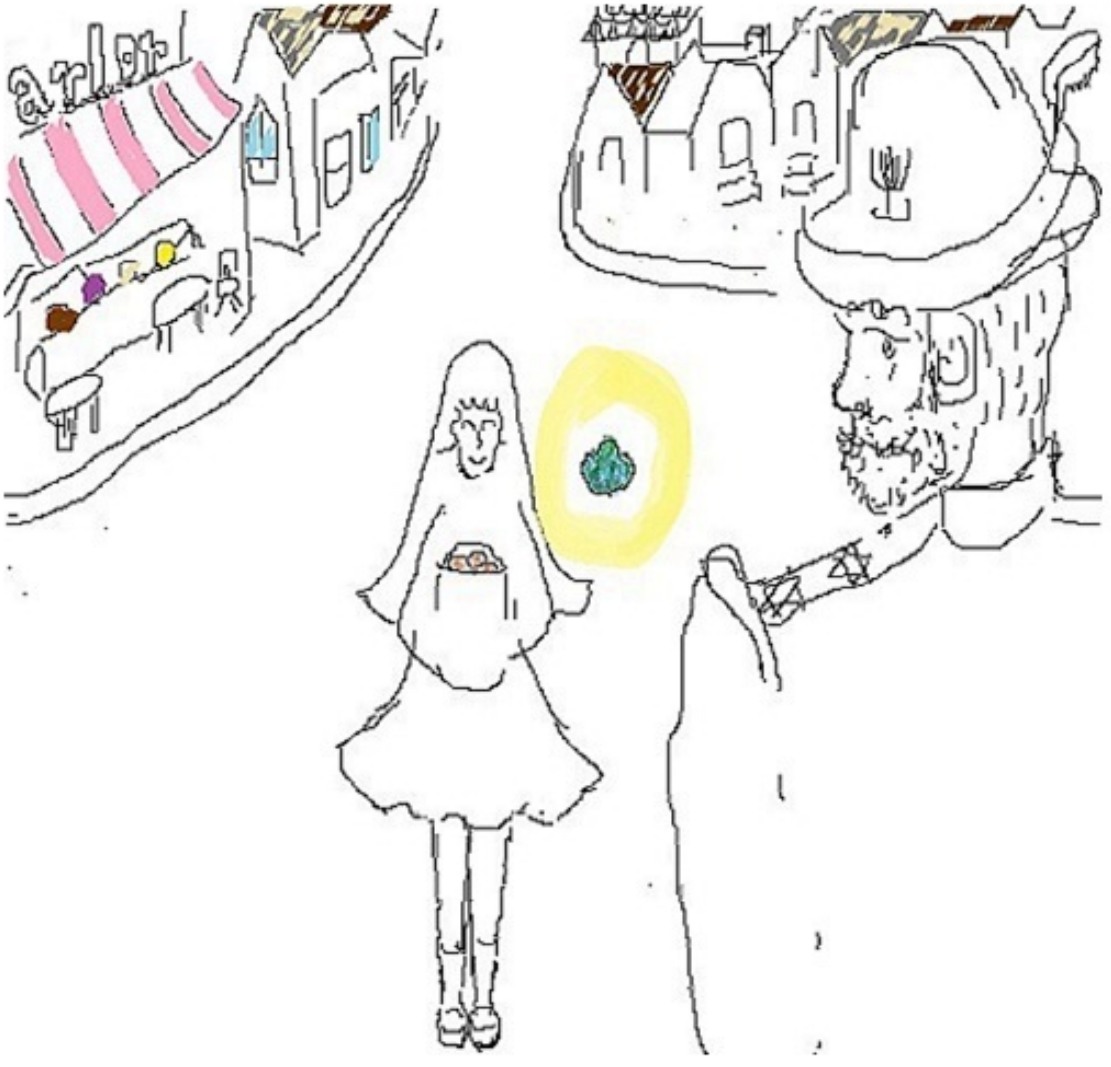
リリスと賢者の石



b-svaha

魔法使いの映画

リリスは、めずらしく雲のない天気のよい午後、ルイスさんに連れられて映画を見に行った。

映画は、「テリーと賢者の石」というタイトルだった。

映画のあと、ルイスさんとリリスは、テムズ川のほとりの喫茶店（きっさてん）で、ピンクのハーブ・ティーや青いソーダ水を飲んで、映画のお話をした。

お話は、もっぱら、リリスが気に入ったところを話し、ルイスさんがそれにニコニコと相槌（あいづち）を入れるだけで、流れるように楽しく時が過ぎていった。

そのあと二人はさよならを言い、それぞれが歩いて帰路に着いた。

リリスは、

（ルイスおじさまは今日もいつも以上に優しかったし、テリーの映画もとてもワクワクして楽しかったわ）

などと考えながら、街路樹に沿って街中を歩いていた。

やや傾き出した西日を背に、ときどき道端のお花に話しかけたりしてとぼとぼと歩いていたリリスは、しばらくすると、自分の右や左に大きな長い影が覆うのに気がついた。

（誰だろう？

もしかして、さっき見た映画の、悪い魔法使いかもしれないわ...）

そう考えたリリスは、肩がキュと縮こまるのを感じ、少しだけハートがワクワクするのも感じた。

（いいこと、リリス。

３、２、1、で勇気を出して振り返るのよ。

そして、「わたしの魔法で石になる？」と叫ぶの！

そうすると、悪者はびっくりして逃げ出すわ）

リリスはそう自分に言い聞かせると、思い切って後ろを向き直った。

すると、リリスは、何だか急に力が抜け、意を決して振り向いた自分を馬鹿みたいだと感じた。

なぜって、そこにボソッと立っていたのは、上着のふちも袖もラッパのように拡がった、古いお話に出てくる砂漠の王様のようなおかしな服を着て、ニコニコしている中年のおじさんだったのだから。

「おじさま、どなたなの？

わたしは、リリスというの。

でも、わたしの名前に、どんな意味があるかなんて聞かないでね。

だってわたし、そんなの知らないのだから」

急に安心したせいか、何だか少し腹が立ってきたリリスは、注文をつけるような言い方でそのおじさんに訊（たず）ねた。

「僕は、ソロモンだよ。

ほら…」

おじさんはそう言うと、今までどこに持っていたのか、宝石で飾られた金の王冠を手の平に載せ、自分の頭にちょこっと置いてみせた。

すると、どうだろう！

いままでちょっとヨレヨレで、古びた時代遅れのように見えたおじさんの服が、金や銀の刺繍（

ししゅう）やエメラルドの宝石を散りばめた、ビロードの高貴な服のように輝いているではないか。

そして、おじさん自身も、それは立派な王様のように見えたのだ。

その王様が頭から王冠を外すと、霞（かす）むようにしてまた元のおじさんに戻っていた。

「ふふふっ。

これで、僕のことをわかってくれたかな？

僕は、悪い人じゃないってことをね」

王冠はもうどこかに消えて、おじさんはまたにこにこ笑っていた。

さっきまで怒り口調だったリリスは、反対に、この風変わりなおじさんが大好きになった。

「おじさまって、とっても変な人だこと！

でも悪い人じゃないことは、ネズミが猫を追いかけないくらい明らかね！」

リリスは、自分の表現がこの場面に正しいかどうか、少し疑問を持ちながらも、嬉しそうにそう応えた。

横に並んだおじさんとリリスは、テムズ川が隠れたり見えたりする町並みを、お話しながら、通りに沿って歩いていった。

「ここが、僕の事務所だよ」

大きな樫（かし）の樹が、モスグリーンの木の家とよく似合う建物の前で、おじさんはそういった。

「事務所って、

おじさまの、お仕事の場所のことでしょう？」

リリスは、不思議なものを見るように、そう訊（たず）ねた。

（だって、昨日まで、ここにこんな家があるなんて、わたしまるで知らなかったもの…）

リリスは、頭の中でそう続けていた。ドアの上には、『ソロモンの法の事務所』と、あまり上手くない文字で書かれた木枠が掛けられていた。

おじさんは、ただニコニコしながらドアのところに行くと、触ってもいない扉（とびら）がゆっくりと開いた。

「おや、少し風が出てきたかな…。

お入り、リリス。

きみに面白いものを見せてあげるよ」

そういうと、

おじさんは、あまり上手ではない口笛を、楽しそうに吹きながら、家の中に入っていった。

リリスは、「ちっとも風なんか吹いていないわ」と頭の中でいいながら、

その先に待っている不思議な世界を感じて、おじさんのあとに続いて入っていった。

法の事務所

入るとすぐに、待合室のような小さな部屋があらわれた。部屋の右奥には、白い木の机と、古い貝殻（かいがら）のように乾いた木の棚があり、棚には、円や三角や、二つのピラミッドの頂点を上下からくっつけたような形の石が並んでいた。

リリスがその石の色を数えると、青やオレンジ、緑、紫など、虹の七色が揃っていた。

机には、『待合室』と書かれた木のプレートと、訪ねてきた人の名前を書くノートと、青い鳥の羽でできたペンが一本ペン立てにあったほかは、部屋には何もなかった。

リリスが、その開いたノートを覗（のぞ）き込んでみると、「魚屋のトム」や「仕立て屋のジョン」などという名前に混じって、ルイス･キャロル、エゼキエル、セント･ジャーメインなどという名前が書かれていた。

（ルイスおじさまもここに来ていたのね！

あのおじさまも知っているこのソロモンという人は、

いったいどんな人なのかしら…。

でも、他の人たちの名前は、ちょっとへんてこりんだったり、普通すぎるような名前ばかりだね…。

それに、待合室と書いてあるのに、このお部屋には椅子（いす）がひとつもないのね…）

そんな風に思っていると、奥の部屋から何だか美味しそうなパンのにおいがしてきた。

リリスは、急に空腹をおぼえ、子猫のように、小さい鼻をツンツンさせながら次の部屋に入っていった。

「あら、わたしったらはしたないわ」

そんな風に頭の隅でつぶやく声には、

「今日は特別な日なのよ！」

と言い返しておいた。

部屋に入ったリリスは、急にエレベーターにでも乗ったように感じたので思わず振り向いてみると、待合室が３メートルも下にあるように見えた。

「ソロモンおじさま、前のお部屋は何のお部屋なの？

座る椅子もないし、何だかとっても下に見えてよ！？」

リリスがそう尋ねると、おじさんはにこにこ嬉しそうにして、お昼に近くのおいしいベーカリーで買っておいたシナモン・ベーグルを差し出して、

「まあ、一つおあがりよ。

飲み物はミルクティーがいいのかな？

いまお湯を沸かしているからね...」

といいながら、ベーグルの入った袋を差し出した。

部屋には、ワインレッドに近い色合いの大きなけやきのテーブルと広い机があり、机には分厚い大きな本が何冊も並んでいた。

それらには、「ソロモンの宇宙の法」というタイトルが付けられていた。

テーブルには、七つに枝分かれした金色の燭台（しょくだい）や、日本という国のお祭の出し物によく似ているといわれる、「契約の箱」と書かれた小さなお宮の模型や、真珠やルビーやダイヤをちりばめた古い宝石箱や、魔方陣（まほうじん）を描いたような敷物が置かれていた。

壁には、７日間で地球を創る様子を描いた神様の絵や、二つに割れた海の間を歩く人々を描いた絵が掛けられていた。

リリスは、テムズ川のほとりでルイスおじさまの語る物語を聞きながら、あれもこれもと次々に質問をしたくなるときの自分を感じながら、まずは、シナモン・ベーグルの甘い香りのお相手を先にすることにした。

（何だかんだいっても、わたしはまだ子供なのよ…）

ミルクティーと美味しいベーグルでお腹一杯になって落ち着いたリリスは、宝石箱の中身が一番気になっていたが、さっきと同じ質問から始めることにした。

「おとなりのお部屋、何のお部屋なの？

どうして待合室に椅子がないの？」

ソロモンは、髭（ひげ）についたシナモンをハンカチで拭きながら、お茶を片手にこう言った。

「あぁ、その部屋はこの部屋に入るための、調整の部屋なんだ。

ここの部屋より低く見えるけど、外の世界よりはずっと高い場所にあるんだよ。窓の外を見てご覧」

リリスが、窓にかかるレースのカーテンをかき別けてみると、確かに３０メートルはあった庭の樫の大樹が、遥か下の方で、小さな花のように立っていた。

「それに、ここに来る人は、みんなその時が始めから決まっていて、待つ人がいないから椅子は要らないのさ。

僕の趣味で、署名だけはしてもらっているけどね」

そういうと、おじさんは右目でちょっとウインクして、美味しそうにお茶のカップを傾けた。

賢者の石

ソロモンおじさんの話では、七つに枝分かれした金の燭台は、メノーラーと言い、おじさんが昔王様をしていた国の神聖な飾り物らしかった。

契約の箱の中には、神様からのメッセージを書いた石盤（せきばん）が入っているらしかった。

リリスは、おじさんがしてくれたどちらの説明にも、お口の中に残ったパンの香りや、指についたシナモンを舐（な）めながら、何となく聞いていたが、あの古い宝石箱の話になったとたん、眉（まゆ）をピンとつり上げ、おじさんの話に集中した。

「この中には、面白い石が入っているんだよ」

ソロモンおじさんはそう言うと、箱の外側を幾重にも取り巻いている金銀の鎖をシャリシャリとていねいに外し、両の親指でゆっくりと蓋（ふた）を開いた。

中には、青と緑を織り交ぜたような、なんとも綺麗な石が一つ、紫のピロードの上にしゃんと置かれていた。それは、目に見えない、深い青の光を放っているようだった。

おじさんは、その石を手に取ると、

「これは、エイラットという、賢者（けんじゃ）の石だよ」

と言いながら、リリスに手渡した。

石を手の平に載せたリリスは、

賢者の石…、エイラット…という響きとともに、

自分がその石の中に吸い込まれていくような気がして思わず目をぱちぱちしばたいた。

「おじさま、賢者の石って、どんな石なの？

この石さん、何だかわたしの子供みたいだわ！

ううん、というより、お姉さまみたいなの！」

「あはははっ。

そうだろうね。

この石は、きみも知らないきみ自身のことを、

そして世界のことを、いろいろと教えてくれる先生みたいな石だからね。

生きる知恵を授けてくれるから、賢者の石といわれるのだよ。

よかったら、きみに上げよう。

困ったことやわからないことがあったら、

何でもこのエイラットに聞くといいよ。

きっときみを助けてくれるから」

「うわぁ～！

なんと素敵な石さんだこと！

わたし、とっても大切にしなくてはね！

ソロモンおじさま、ありがとう！！」

リリスは、椅子に座ったソロモンの首に両手を巻きつけ、赤ひげの頬（ほお）にキスをした。

リリスが帰ろうとして、エイラットをていねいにハンカチに包んでいると、玄関の呼び鈴（よびりん）が鳴り、ルイスおじさんが女性を連れて入ってきた。

「リリス、やっぱりここにいたんだね。

きみの家に寄ったら、まだ帰っていないといわれたから。

ほら、この方が、僕たちが今日観た映画の本を書いた方、キングさんだよ」

ルイスおじさんはそう言って微笑（ほほえ）んで、女性の方を見た。

「あなたがリリスね！

あなたに会えるのをずっと夢見ていたの！」

彼女はそう言うと、我が子のようにリリスを抱きしめた。

過去世

あの日、ソロモンおじさんのところでエイラットをゆずり受けて以来、リリスはいろいろなことをこの石に尋ね、自分の様々な過去の記憶を取り戻し、未来や現在のことを知ることができた。

例えば、ルイスおじさんとキングさんが、ソロモンおじさんの家を訪れた理由をエイラットに聞いてみると、（テリーの物語を通して、人々が失ってしまったほんとうの夢見る力やほんとうの知恵を取り戻すためには、どんなお話にすればいいのか）を、ソロモンに相談しに行ったのだと教えてくれた。

そして、それにはリリスの今後の活動も関わっているのだともいわれた。

また、あるときリリスは、エイラットに向って、大好きなルイスおじさまについて、どうして自分はそう感じるのかと聞いてみた。

すると、目の前にかすむようにして映像が見えてきた。

始めに、イタリアかどこかの国の格好をした男の人と、五歳くらいの女の子の姿が浮かんできた。

建物や服の様子から、ルネッサンス期に生きていた父子であることがわかった。

リリスが子供で、父親がルイスおじさんだった。

仲良く手をつなぎ、町の広場を楽しそうに歩いていた。

その映像が消えた後、もっと遠い昔のアジアの国にいる男女の姿が見えてきた。

男は手に大きな黒い本のようなものを持ち、頭には長く垂れ下がった覆（おお）いのようなものを被（かぶ）っていた。

お城の大きな門をくぐって出てきたその人を女の人が出迎え、ニコニコしながら夕暮れの町に消えていった。

二人は仲のよい夫婦だった。

（だからわたしはルイスおじさまが大好きだし、おじさまもわたしを好きなのね！！）

リリスは、やっぱりそうだったのかと思い、とても嬉しかった。

また、あるとき胸に石を置いてベッドに横になっていたら、広い草原にたくさんの原始人のような人たちが出てきた。

彼らは、動物を追いかけたり、火を起こしたりしていた。

すると、空から何か光る歯車のようなものが現れ、驚いた人々が岩や木の陰に隠れると、宇宙服を着た自分がその光の乗り物から降りてくるのが見えた。宇宙服の頭にはうさぎの耳、お尻には、白くて円いしっぽがついていた。

（わたしって、やっぱり地球の人じゃなかったのね…。

どうりで、学校のお勉強は何だかちっとも覚えられないし、

すぐに、いつも変なことばかり考えちゃうのもそのせいだったのね！）

リリスは、エイラットが、「そのままの自分でいればいい。リリスは、リリスで完璧（かんぺき）なのだから」と教えてくれている気がした。

また、あるときリリスは、自分のことが一冊の本になり、やがて世界中の人々に読まれ、映画にもなることを知らされた。それも、いくつもの映画になるということだった。本は、ルイスおじさまがテムズ川のほとりやボートの上で話してくれたものからできるらしかった。

「わたし、そんなに有名になるなんて驚きだわ！

でもそのためには、もっと英語の言葉もたくさん覚えて、地理や歴史、算数のお勉強も怠（なま

）けちゃいられないわね…」

リリスは、嬉しいような、ちょっと大変な仕事を引き受けたような気分でつぶやいた。

こうして、
リリスは、自分がどうして今生（こんじょう）でルイスおじさんやキングおばさんに出会い、これからどんなことをしていくのかについて、毎日エイラットに教わる日々を重ねるうち、気づきと目覚めの感覚を育てていった。

「この青い光を放つ石は、やっぱりわたしのお姉さん先生だったのね…。

ありがとう…わたしのエイラット…。

ずっと、ずっと、わたしと一緒にいてね…」

消えた真理の教師

その日、朝目が覚めるとすぐに、リリスはエイラットのきらきらと光る姿がとても懐（なつ）かしくなり、宝石箱を開けると声に出してそう言った。

朝寝坊なリリスは、起き抜けには特に口が重く、普段は両親におはようを言われても、むにゃむにゃと口を動かすのがせいぜいだったが、この日は不思議こう話しかけていたのだ。

そして元気に学校へ行き、お友達と楽しくお話し、退屈（たいくつ）なお勉強もがんばり、いつものように見え隠れするテムズ川と追いかけっこするようにして家に帰ると、

「ただいま～、帰ったわよ～♪」

「わたし～のエイラットちゃ～ん♪」

と勝手なメロディーで歌うように挨拶（あいさつ）をして、宝石箱のふたを開けた。

リリスの目は大きく見開き、心臓がキューンと音を立てて小さく凍（こお）るのを感じた。

淡（あわ）い青の光で優しく彼女を迎えてくれるはずのエイラットの姿が、そこにはなかったのだ。

とても慌（あわて）てしまったリリスは、

「いいこと、リリス！

あなたは、リリスよ！！

うさぎの宇宙服を着て宇宙を飛び回り、

ルイスおじさまの奥様だったこともある女の子よ！！

だからあなたには、何でも起きるし、何でもできるのよ！！」

そう言い聞かせ、落ち着いて、石をどこに置いたかを考え始めた。

でも、ポケットに石を入れて遊びにいったままどこに置いたかを忘れるという経験（けいけん）のあと、一度も自分の家から外に出したことがないことをリリスはすぐに思い出した。

その日も、朝起きてすぐ挨拶しただけで宝石箱のふたを閉め、ベッド脇（わき）の小さなテーブルの上に置いたのだった。

そうとは思いつつも、リリスは家中を探し、

表の庭の花壇（かだん）や、一つ一つの鉢植（はちう）えの裏も全部探し、いつも通る道すがらのあちこちを、エイラットを探してさ迷い歩いた。

石は、どこにも見つからなかった…。

リリスは目から涙をポロポロ流し、当てもなくめちゃくちゃに歩いた。

気がつくと、いつの間にか、ソロモンおじさんの事務所が目の前に見えていた。

リリスは、黙ってドアを開けると、中に入っていった。

ソロモンは、リリスの顔を見るなり、何が起きたかを一瞬で察知（さっち）したようだった。

「エイラットが、なくなったんだね…」

その言葉を聞いたリリスは、言葉もなく大声で泣き出してしまった。

リリスがひとしきり泣いて、悲しみの涙が少し乾（かわ）いてきたころ、ソロモンは瑠璃（るり）色のソーダ水を差し出した。

「冷たくて美味（おい）しいよ」

泣いて歩き回ったリリスは、喉（のど）がカラカラに渇いていた。ソーダ水のきれいな青が、心の中の雨を止めてくれた気がした。

「きみは、あの石をなくしてなんかいないよ。

あの石は、きみの元を去ったんだ。

きみはもう、あの石から必要なことを全部学んだから、あの石が要らなくなったんだ。

エイラットは、それがわかっているから消えたのだよ…。

ほら、ご覧、きみのハートには、もうあの青い光が輝いているよ」

リリスが下を向くと、胸の真ん中でエイラットがきらきらと微笑んでいるようだった。それは、ふわふわとして暖かい光だった。

「本当の『賢者の石』は、きみのハートの中に、これまでずっとあったのだよ。

あの石は、きみがそれを思い出すために、きみの元にきてくれたんだ。

あの石は、だれか僕のような人のところで、次に知恵を与えるべき人の元にもらわれていくのを待つのだよ。

その人は、一生エイラットと過ごすかもしれない。

でも、もしかしたら七日間でお別れするかもしれない。それは、石をもつ人によって、みんな違うんだ。

そしてそれは、出会う前から決まっていることなんだよ。だけどどれも、悲しいことではないんだ…」

ソロモンはそういうと、リリスの髪をそっと撫（な）でて、いつもの微笑みを浮かべた。

「おじさま…。わたしはこれから、どうしたらいいの？

今もエイラットと一緒なことがわかったから、もう悲しまなくていいとは思うけど…」

「きみは、これまでそうだったように、これからもそうして生きればいいんだよ。

それは、『何か、ふりをする』ということなんだ。

きみは、想像力（そうぞうりょく）を使って、空想（くうそう）して遊ぶのが大好きで、とても上手だよね。

きみは、『降（お）りてきたふり』をして、想像力を用いていろいろなものを作り出すことを、これからもっともっとしていくだろう。

そして、世界中の人に、その楽しさを教えることになるんだ。

そしたら人々は、その力を使って、今度は『上がっていくふり』をしたくなるんだ。そうすると、本当に上がった先の世界が、いつの間にかこの世界になるのだよ。

きみはそれをみんなに知らせるために、これから物語の主人公となって、いろんなことをして楽しく遊べばいいんだよ。

もう、上がっていくふりをする時が来たことを知らせるためにね」

おじさんの言葉を聞いていたリリスは、

胸の中のエイラットが、嬉（うれ）しそうに何度もうなづくのを感じていた。

「おじさま、わかったわ！」

リリスはそう言うと、急にお腹が空いているのを感じて、さよならをいい、ソロモンの事務所を離れた。

ありがとう、王様...

次の日の土曜日、おじさんに教わったパン屋さんでおいしそうなシナモン・ベーグルを二つ買ったリリスは、いそいそと嬉しそうに、おじさんの事務所へと歩いて行った。

ところが、いつもの大きな樫（かし）の木はそこにあるのに、緑色に塗（ぬ）られ、下手な字で、『ソロモンの法の事務所』とプレートをぶら下げたあの家は見る影もなく消え、そこには、薄（うす）ぼけたペンキで、『クリーニング屋』と書かれた看板のある建物が、毎日その前を通っても気づかれない風采（ふうさい）でいつも通り店を開けていた。

言葉をなくしたリリスが、まだ温（あたた）かいベーグルの入った紙の袋を手に立っていると、

「リリス、シナモン・ベーグル、おいしそうだね！

きみにはもう、ぼくは必要ないんだよ...。

きみの本当の教師（きょうし）は、いつもきみの中にいるのだから...」

というソロモンおじさんの声が、どこからか響（ひび）き渡った。

「ありがとう...、王さま...」

リリスは少し微笑（ほほえ）んで、いつまでもそこに立っていた...。

次の日の土曜日、おじさんに教わったパン屋さんでおいしそうなシナモン・ベーグルを二つ買ったリリスは、いそいそと嬉しそうに、おじさんの事務所へと歩いて行った。

ところが、いつもの大きな樫（かし）の木はそこにあるのに、緑色に塗（ぬ）られ、下手な字で

、『ソロモンの法の事務所』とプレートをぶら下げたあの家は見る影もなく消え、そこには、薄（うす）ぼけたペンキで、『クリーニング屋』と書かれた看板のある建物が、毎日その前を通っても気づかれない風采（ふうさい）でいつも通り店を開けていた。

言葉をなくしたリリスが、まだ温（あたた）かいベーグルの入った紙の袋を手に立っていると、

「リリス、シナモン・ベーグル、おいしそうだね！

きみにはもう、ぼくは必要ないんだよ…。

きみの本当の教師（きょうし）は、いつもきみの中にいるのだから…」

というソロモンおじさんの声が、どこからか響（ひび）き渡った。

「ありがとう…、王さま…」

リリスは少し微笑（ほほえ）んで、いつまでもそこに立っていた…。

おわりに

　この作品が書かれた２０１０年当時、わたしは、新約聖書に登場するキリストの１２弟子の一人とされる存在と、とても深い関係を覚える状況に囲まれていました。
　彼は、頂いた本や、仕事で出会った人や、暮らしをともにする友人などを介して、急速にわたしにコンタクトしてきました。偶然の一致、シンクロニシティによるこうした出来事の連鎖は、決して個人では演出できない環境であることから、わたしは彼の存在を信じるようになり、それに連れて、彼との通信もそれなりの精度を伴うようになりました。

　このお話は、そんな環境の中、自然と書かれました。加えて、アリスにまつわるお話を書いて欲しいという友人からの依頼も、その数か月前から受けていました。
　そして、この話を含むいくつかの物語を書き終わったころから、わたしのこうしたチャネリング的な環境は、次第に消えて行きました。かの存在とのコンタクトも終わりました。彼が「視える」友人も、わたしから去って行きました。

　今思えば、わたしの人生のあの時のこうした流れは、リリスの物語をよく象徴する、まさに二重写しのような、リアルでの体験だったと感じられます。

　人生には、理性では解し得ない出来事や流れが突発的に起きるものです。リリスに起きたことも、わたしに起きたことも、それを端的に示しています。

　そうした出来事が起きた時、どうすればよいのか…。

　人は、何を「ほんとうに」信じればいいのか…。

　このシンプルな物語は、ファンタシー童話という形で、楽しみながら、ごく自然にそれに気づかせてくれるものと信じます。
　小さなお子さんのいる方は、ときどき読み聞かせていただくと、楽しみながら、人生で必要な本当の知恵を、早くから目覚めさせることができるのではないかと、密かに期待しています。

　この本を読まれることが予めき決まっているみなさまに、心から感謝いたします。

　この機会を与えてくださった、ブクログのみなさまにも、心よりお礼申し上げます。

　２０１４年５月６日

v-svaha

リリスと賢者の石

http://p.booklog.jp/book/85562

著者 : b-svaha
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/b-svaha/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/85562

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/85562

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ